

～ 涼もとめ

クサギ, ミズヒキ, クズの花
森の真夏を楽しもう～



相生山の四季を歩く会 2020.8.9

参考資料: 山溪ハンディ図鑑「樹に咲く花」、「野に咲く花」など



クサギ(臭木) シソ科クサギ属

落葉小高木 林縁部に多く生育

対生 全縁 冬芽:裸芽 葉痕:楕円型
集散花序 芳香 花冠5裂 雄性先熟
花のあと萼は濃紅色に深裂,星型の中央に
果実をのせる。核果 光沢ある藍色に熟す
用途:若葉は山菜,果実は草木染,根は薬草



ミズヒキ(水引) 好科好属

花序を上から見ると赤く,
下から見ると白く見える。
葉は互生,中央付近に
しばしば黒い斑点。そう果は
花被片に包まれて熟し,先が
鉤型に曲がった花柱が残り,
くつつき虫として繁殖。



クズ(葛) マメ科クズ属

ツル性多年草 全体に黄褐色の粗い毛
茎の基部は木質。葉は3小葉。花は総状。
豆果。根からとったデンプンが葛粉。根を
乾燥させ葛根湯。茎の繊維で葛布。
古代より重用されてきた。



ヘクソカズラ(屁糞蔓) アネ科ヘクソカズラ属

別名:ヤトバナ(灸花),サトメカズラ(早乙女蔓)
ツル性多年草 左巻き 茎の基部は木質化
対生 核果 しもやけ薬として古くから利用



ヌルデ(白膠木) ウルシ科ウルシ属

落葉小高木 ごくまれにカブレ被害あり
互生 奇数羽状複葉 葉軸に翼あり
雌雄異株 円錐花序 雄花花弁反返る
核果 冬の野鳥たちの貴重な食糧
幹から白い樹液→器具に塗る→ヌルデ
材は護摩木、樹皮は染料、果実は蠟材
虫えいは五倍子→タンニン→薬用,染料



イヌザンショウ(犬山椒)

ミカン科サンショウ属 落葉低木
枝に棘が互生状につく
奇数羽状複葉 葉軸に狭い翼
雌雄異株 散房花序
比較:サンショウは棘が対生
葉や果実の匂いに差。
用途:葉・果実→咳止め,
果実油→灯油,整髪油



ヤブガラシ(藪枯らし)

ブドウ科ヤブガラシ属
別名:ピンボウカズラ(貧乏蔓)
地下茎を伸ばし藪を枯らす勢いで
繁茂する。別名は手入れの悪い
「貧乏くさいところ」に生育から。

ツル性多年草 葉は5小葉
花は小さく,4花弁緑で地味。
雌しべ囲む橙色の花盤目立つ。
雄性先熟。朝開花,午前中に花弁
と雄しべ落ち,花盤は淡紅色に。
果実は黒く熟すが,虫えいになる
ことが多い。



果実のようすも
忘れずに...
これはリョウブ

立秋なので 秋の歌

秋の野に 咲きたる花を 指(および)折り
かき数ふれば 七種の花

萩の花 尾花 葛花 なでしこの花
をみなへし
また藤袴 朝顔の花

万葉集より
山上臣憶良
詠秋野花歌二首
巻8-1537-1538

次回は 9月13日(日) 9:30

～ 秋の七草
ハギのお花見 ～

つぎの昆虫観察は10月予定



連絡先 (古川)

tell/fax: 052-821-6463

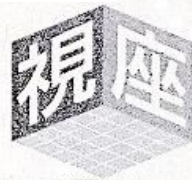
ケイタイ: 080-5124-6463

e-mail: viva_forest@yahoo.co.jp

ホームページ: ラブリーアース → 検索

ブログ: 相生山からのメッセージ

中日新聞copy



内山 節



哲学者

以前に私の友人が、水田で暮らす虫の調査をしたことがあった。虫といっても昆虫だけでなく、クモやタニなども多く含まれている。水田では百種類を超える虫たちが暮らしていた。

その虫を分類してみると、稲の生育に悪影響を与える「害虫」は極わずかで、その「害虫」を食べたりする「益虫」もまた極わずかだった。ほとんどは害もないが益もない「ただの虫」である。こんな構成で水田の虫の世界はできあがっている、それは水田の水や土のなかの生き物の世界

でも同じだった。水田の自然の世界は、こんなふうには形成されてきたのである。多くの「ただの虫」がいて、少数の「害虫」の「益虫」がいて、そ

れらのすべてが自然界では育に大きな影響を与えることはない。自然との共生とは、自然の有機的世界を守って「そ

ウイルスと共生できる文明のかたち

何らかの役割をもち、複雑な関係を結びながら、みんなが生きていける世界をつくっている。「このかたちが維持できているかぎり、

「害虫」も極端に勢力を伸ばすことはできず、稲の生育に大きな影響を与えるこ

そのなかの一部だが、現在の新型コロナウイルスをはじめとして、インフルエンザウイルス、風邪ウイルス、狂犬病ウイルス、C型肝炎ウイルス等々、人間にとつては不都合なものが並ぶ。

ところで、ウイルス感染は文明病だという性格をもっている。天然痘は紀元前九〇〇年頃にメソポタミアのなかで広がったと考えられているが、それはエジプト文明やその後のギリシャ文明のなかで勢力を拡大していった。文明の発展は人口密集地をつくり、ウイルスにとっては活動しやすい環境が整備されたのである。新型コロナウイルスも、大都市を形成し、グローバルに人や物が移動する現代文明があったからこそ、短時間で世界に蔓延す

るようになった。仮に新型コロナウイルスに対する効果的なワクチンが開発されたとしても、私たちはこれからも新しく発

自然の一員であることに変わりはない。ちなみに現在存在するウイルスは三万種くらいあると考えられており、六百五十種は哺乳類や鳥類に感染すると思われる。人間に感染するのは

「自然との共生」をスローガン・言葉だけでなく、身近な場所で、自身の生き方で、試みていくことが問われています。

より賢く、考え行動する未来をつくりだすことが、いま私たちに求められていると思います。

なので、私たちは相生山にこだわり続けています。相生山から離れられない理由がここにあります。



だから私たちは相生山を離れない

名古屋市は「道路計画を廃止し、相生山緑地を整備する」都市計画変更に向かっていたのに、「道路の必要性を調査検討し、手続き着手の是非を判断する」と方向転換したかに見えます。

しかし、私たちは変わりません。自然環境、相生山の生態系を壊してまでつくる道路は要らない、と思います。

これからも相生山の現地にこだわり、さらに多くの方々と結びついて、自然を大事にする生き方、市政を呼びかけていきます。



相生山の「道路」シエルトー上より西方向、下山畑交差点、都心方面を望む

められる。大量生産、大量消費型の文明も、都市にあらゆる機能を集積する文明や貧困を生み出す文明も、さらには自然を遠くに押しつける、人工的につくられたもので包み込んでいく文明も、ウイルスの活動を活性化させる温床になってしまう。水田の生態系が保たれていれば、「害虫」もまた共存できる程度に生きているように、人間たちはいま、不都合な生き物とも共存できる文明のかたちを、みつけ出さなければいけない岐路に立たされているのだらう。